

クラン・コラ Cran Coille : ケルト・北欧音楽の森

Editor : hatao October 2018 Issue No.279
ケルトの笛屋さん発行 <http://www.celtnofue.com/>

クラン・コラは月に2回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国のライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

お知らせ：吉田文夫さんの連載は今月は休載となります。

CONTENTS

- (1)ブルターニュの至宝・フルート奏者Jean Michel Veillonの
日本ツアーが始まります！ その2 hatao
- (2)Shanachie 新作CD "She was under the tree" 大島 豊
- (3)Colleen Raney——アメリカで伝統をうたう試み・その14 大島 豊
- (4)坂本龍一が語ったグループについて field 洲崎一彦
- (5)オーケストラアレンジで聴くケルト・北欧の伝統音楽
第10回 アイルランド狂詩曲 吉山 雄貴
- (6)ざっくり学ぶケルトの国の歴史 (17) 独立する直前のお話
上岡 淳平
- (7)編集後記

■ (1)ブルターニュの至宝・フルート奏者Jean Michel Veillon
■ 初めての日本ツアーが始まります！ その2 hatao

フランスのブルターニュのケルト音楽を演奏するJean-Michel Veillon (ジャン・ミシェル・ヴェイヨン)さんの初来日ツアーがもうあと2週間ほどで始まります。

先月号ではブルターニュ音楽とジャンさんの功績について書きました。

ジャンさんについては、たくさんのインタビュー記事がありますので、より詳しく知りたい方は、こちらをぜひご一読ください(日本語)。

https://celtnofue.com/column/musician/interview/index.html#p_brittany

私がジャンさんのことを知ったのは学生時代にアイリッシュ・フルートを始めた2000年のことでした。当時はアイルランド音楽に夢中で毎週セッションに通っており、頭の中はリールやジグでいっぱい。そんな中で、アメリカのGreen Linnetレーベルから発売されていたバンドKornogのCDを聴いたのです。

ジャンさんの名前は海外のフルート奏者のインタビューの中でもたびたび言及されており、興味を持っていました。ジャンさんのフルートはそんなアイリッシュどっぷりの私にとって、目を見開くような体験でした。

彼のフルートはアイルランドの奏者とは全く違う表現スタイルです。アイルランド音楽ではダンス音楽が主であり、リズムの装飾の美しさ正確さが命ですが、ジャンさんの音楽はブルターニュのダンス音楽でありながら、心の内面の機微を表現しているように感じました。演奏技法的には、アイルランド音楽ではあまり開拓されていないタンギングの可能性、そして東洋の音楽から発想を得た様々なフルートの新しい奏法を積極的に取り入れています。

ジャンさんは数多くのバンドで活躍していますが、特にフルートとギターのデュオが素晴らしく、シンプルかつ深みのある演奏を細部まで堪能することができます。ジャンさんにとっても、デュオはひとつのテーマであるようで、これまでYconさんとのデュオとしてライブアルバムを含む4枚のCDを発表しています。

デュオ作品として最もおすすめするのは、こちらのCDです。

<https://celtnofue.com/items/detail.html?id=590>

ジャンさんのもうひとつの魅力は、その音楽性の幅広さ。ブルターニュでもともとフルートが使われていなかったため、アイルランドやスコットランド音楽から演奏技術を学びました。そのためブルターニュ音楽のほかにアイルランド、スコットランド音楽の演奏も得意としています。さらに、Kornogでは東欧音楽の演奏も手がけており、今回のコンサートではどんな音楽が聴けるのが楽しみです。

ケルト音楽ファンはもちろん、フルートなど管楽器奏者は絶対に見逃してほしくないコンサートです。たくさんのインスピレーションと知識を得られることでしょう。

ジャンさんのツアーは11月3日(土)の大阪から始まります。
チケットの予約は下記からどうぞ。

<https://celtnofue.com/about/jmv.html>

■ (2)Shanachie 新作CD "She was under the tree"

■ 大島 豊

北欧音楽を演奏するトリオ Shanachieの5年ぶりの新作が発表となりました。
今回は北欧音楽を中心に、初めて完全インストのみの作品です。
絵本の世界の中で物語を見ているような情感に溢れた音楽です。

試聴はこちらから

<https://youtu.be/v7fXYHYQpHA>

ご購入はこちらから

<https://celtnofue.com/items/detail.html?id=798>

「どこか懐かしいアコースティックな楽器を用いた、不思議な音色に包まれて、楽しくて美しい北欧のおとぎの森へ。

ケルトや北欧の伝承音楽を、幻想的なアレンジで演奏する女性トリオ、シャナヒー5年ぶりの新譜！伝承曲からオリジナル曲まで、色とりどりの音色でファンタジックに綴る、11の物語。」

大島豊さんによるレビューが届きました。

シャナヒーを初めて聴いたのは《TIME BLUE》(2008) でした。もう十年前になる、とあらためて遠い眼になります。今の時代、十年というのはかつての30年ぐらいに相当しましょう。スコットランドやアイルランドの曲やそこに連なるオリジナルを、フィドルと笛とピアノで演奏し、思い切りとセンスの良いパーカッションが引き締めた佳作でした。当時の国産のケルト系の録音では群を抜いたア

レンジの巧みさに舌を巻いたものです。そして音楽に対する大胆なアプローチにも感心しました。その代表はラストの〈ていんさぐぬ花〉で、あえて沖縄の匂いを消し、シャープなパーカッションが拡大するより大きなスケールの中で唄いきってみせた力業は、十年を経ても色褪せません。

5年後の《LJUS》(2013)では変化の大きさに眼を瞠りました。まずピアノが消えて、全面的にハーブに交替しています。そして、素材はすべてスカンディナヴィア。ここではまず3人のゲスト・シンガーを迎えての歌に耳を惹かれました。とりわけ歌詞を日本語に置き換えて唄われる2曲は、日本語化の見事さとうたい手の咀嚼消化の徹底に感服しました。全体としてもアレンジはさらに練りこまれています。スキルとセンスともに一段と磨きのかかったパーカッションが、そのアレンジを多彩にいろどります。フィドルも「声」の幅が広がり、楽曲の生まれた場所の空気を感じさせます。本人たちであれ、誰であれ、これを凌ぐ録音を作るのはほとんど不可能とも思えました。

《TIME BLUE》から《LJUS》への変化は《Celtsittolke》(2010)と《Celtsittolke Live》(2012)で少し伺えます。前者ではフィドル、バウロン、ピアノのトリオによるシンプルな組立てで、アイリッシュを演奏。後者では〈She Moved through the Fair〉が収められていますが、ピアノからハーブに交替。

《LJUS》の手応えを本人たちも自覚していたのでしょうか。さらに5年後のこの最新作では、方向を変えています。《TIME BLUE》から《LJUS》への転換に比べれば、一見（一聴？）変化は小さいようにもみえます。

素材は今回もすべて北欧です。スウェーデンやノルウェイ、デンマーク、フィンランドは、各々に音楽伝統の厚い地域で、伝統音楽の現代的展開にも熱心でもあります。アイルランドやスコットランドでもそうですが、音楽のジャンルの間の垣根が低い。とりわけ、フォーク・ミュージックとクラシック、ジャズのミュージシャンたちはおたがい相互交流しています。アバのベニー・アンダーソンは伝統音楽のアコーディオン・プレーヤーとしても知られます。スウェーデンでは1960年代から伝統音楽をジャズに取り入れる試みをしています。1970年代初め以降、ロックの洗礼を受けた若い世代による同時代音楽としての伝統音楽の展開もしてきています。

わが国のミュージシャンたちが、そうした成果に本格的に触れるのは前世紀末、デンマークのハウゴー&ホイロップやスウェーデンのヴェーセンなどを通じてですが、2010年代も後半になって、急速に関心が高まっているようにみえます。京都のドレクスリップと並んで、《LJUS》はそうした動きの先駆けでもありました。

それにしても、このアルバムでの北欧音楽の消化の徹底していることは、他には肩を並べられるものが見当りません。その消化は、精緻を極めたアレンジを施

してゆくことで可能になったとも見えますし、またその消化があったればこそ、極限とも思えるアレンジができたとも思えます。あるいは各々が互いにあざないあって、どんどんと深みにはまっていったのかもしれませんが。

今回は歌はなく、すべて器楽曲。しかし、どの曲も実に「雄弁」です。アレンジの編み込み方は、前作と比べてもほとんど次元を異にすると言えるほどに複雑に緻密になっています。どの楽器が何をやっているのか、うっかりするとわからなくなります。例えば[02]では、ハープからフィドル、ヴィオラ、オルガンへとメインのメロディが受け渡されてゆきます。受取る前も、受け渡した後も各々の楽器はハーモニーに回ったり、裏メロを奏でたり、時にはユニゾンにもなります。どの楽器もメインのメロディを演奏していない時もあります。

こうした手法はチーフテンズのお家芸で、クラシックからの借用ですが、この録音ではチーフテンズのものがごくプリミティブな試みに聞えてしまうくらい遙かに洗練されています。チーフテンズでは担当している楽器はユニゾンですし、渡してしまえば休みます。こちらでは、各楽器の関係も錯綜していて、簡単には追っていきません。時には眼が眩むほどですが、しかし、全体としては整然として美しい。聴くたびに新鮮な曲が姿を顕わします。クラシックの管弦楽法なら、チーフテンズをモーツァルトとすれば、こちらはリムスキー・コルサコフやラヴェルの域にあります。というよりはジャズのビッグバンドの最先端に近い。マリア・シュナイダーの音楽や、あるいはいっそカマシ・ワシントンのものにも通じましょう。

[02]はパーカッションを外していますが、[03]では多彩なパーカッションがリピートごと、フレーズごとにカラーを変えてゆきます。ここではハーディガーディも加わって、[02]とは対照的なダイナミズムあふれる演奏。

例えていえば、ビザンティンのモザイク画、あるいはモロッコの緻密華麗な紋様を思い起こします。個々の要素をとりだすと、それぞれ勝手なことを勝手にやっているようですが、全体として見ると、鮮明で美しいイメージを生み出します。

細かい役割分担と相互の緻密なやりとりを重ねて複雑精緻なアレンジを編みなし、静謐かつダイナミックな美しさをかもし出す手法は、《LJUS》の〈Marionette Halling〉や〈Sleepers, Awake!〉の後半にすでに顕れています。もっとも編み目はずっと緻密になり、生み出されるイメージの豊饒さも一段と深い。

アレンジだけではありません。スキルの点ではまずフィドル。もともと深い響きが、一種鄙びた味わいを帯びてきました。いなたいといっちは失礼になるような威厳があります。[07]の後半のリードのタイム感は絶妙ですし、[06]で、ハープに対してシンプルなりフというよりいくつかの音をドローン的に置いてゆくときの響き。これはハーダンガー・フェレで、また一段と響きが豊かです。そして

[10]の後半での無伴奏ソロには、自然と背筋が伸びます。ちなみに[06]ではラストにダブル・ベースが残ってメロディを奏で、鉦がリーンと相槌を打つのが粋。

パーカッションのセンスにはもともと並はずれたものがありました。この鉦にも頭われるように、また一皮剥けたようでもあります。時にはまるで外的な音を一見気まぐれにはさんだりもします。それが一々、はまってゆく時の快感は筆舌に尽くしがたい。随所で入れるビブラフォンやグロッケンシュピール、あるいは[08]でビートを刻む捻ってキリキリリリという音を出すもの（すみません、無知で名前を知りません）など、ユーモアのセンスが全体を明るくします。それもあって、この[08]はユーモラスなことではアルバム随一。ちなみに楽曲の美しさでは[10]が、豪華な愛らしさにあふれて、頭抜けています。無伴奏フィドルのソロに続く爆発するバンドのスリルには何度聴いても息を呑みます。

ハーブは難易度の高いことをやるわけではありません（[04]のハーモニクスを交互に入れるのは難しそうだが）、身体にすっかり馴染んでいます。これに比べてしまうと、《LJUS》の時はまだ初々しさがみえます。ギター的にリズムをつける時のアクセントの付け方はレベルが違います。

サポート陣ではアコーディオンの活躍が目立ちます。参加している曲では、アンサンブルの一角として、メインの3人とまったく対等からみ合います。加えて、出番は多くないが、コントラバスがいい味。低域を支えるよりも、全体の膨らみを増します。

全体にテンポの選択がうまい。[08]の後半を除いて、アップテンポといえる曲は無く、ミドルからスローが基調ですが、参加しているミュージシャンはいずれもすぐれたリズム感覚を備え、曲の中でも自在に変化します。アルバムを通して聴いても、気持ちよく曲が流れる。

先にも触れましたが、これはフォーク・ミュージックの範疇ではないでしょう。スウェーデンでいえば、リエナ・ヴィッレマルクとアレ・メッセルが ECM でやった "Nordan" Project の手法とも違います。あそこにはまだジャズの手法を使う意識が働いています。フリーフォートは、各楽器が独立し、いわば自分の存在をぶつけ合います。シャナヒーでは、ミュージシャンの個性は明瞭ながら、たがいに最も気持ちがよくなる形の絡み方を見つけようとしています。

このアルバムは1個の「芸術品」と呼ぶべきでしょうが、グリーグ、シベリウスやニールセンのようなクラシックでももちろんありません。伝統音楽を素材とし、あくまでも素材の味を活かし、何かのひな型や枠組みにあてはめるのではなく、素材の潜在性を最大限に引き出し、楽曲そのもの、メロディそのものを可能性いっぱいまで展開しています。やはり言葉の最も広い意味で「ジャズ」と呼んでいいものではないか。あるいはむしろ、これもまたフォーク・ミュージックであり、フォーク・ミュージックの可能性を極限まで拡大している、と言うべきでしょうか。

ここに生まれているものは新しいものです。それも、新しいものを作ろうとして生まれたものではない。楽曲との対話のうちから生まれています。それは聴けばわかります。何かをめざして組み立てていったものではない。対話を繰り返しながら、楽曲の、音楽の向かおうとする方へどこまでも進んでいった。ですから複雑精緻でありながら、どこにもストレスがかかっていません。ごく自然に流れています。聴き手もごく自然に気持ちよくなります。聴くほどに、楽曲の内部へ、音楽の内部へと惹きこまれます。求心的ですが、通常求心的な音楽に付随する窮屈さがまったくありません。緊張と弛緩が同居しています。

シャナヒーのアルバムはいずれも録音が優秀ですが、これも精緻なアレンジとダイナミック・レンジの広いパーカッションをしっかりと捉えた録音が見事です。

■ (3)Colleen Raney アメリカで伝統をうたう試み・その14

■ 大島 豊

アメリカのケルト系シンガー、コリーン・レイニィの録音を聴くシリーズ。今回から彼女の4枚めのアルバム《Here This Is Home》を実際に聴いてゆく。

01. Canadee-I-O 03:52

ボブ・ディランが伝統歌をうたった《Good As I Been To You》(1992)でとりあげて、一気に認知度が上がったが、そのディランが手本としたのはイングランドのNic Jonesの《Penguin Eggs》(1980)冒頭のヴァージョンだ。手本というよりも、ほとんどそのままのコピーで、フォーク・シンガーとしての駆け出しの頃、イングランドのマーティン・カーシィなどをコピーしていたのと同じである。そのアルバムには曲に関する情報、クレジットなどがまったく無かったため、fRoots編集長Ian Andersonが同誌に書いたレビューで、そのことを批難した。伝統歌の録音では、この歌は誰その歌唱から習ったという情報を付けるのがマナーとされているからだ。おそらくディランはこれを読んだのだろう。次の、やはり同様に伝統歌をうたった《World Gone Wrong》(1993)では詳細なノートを付けたものだ。

この歌は、むしろ北米で広く唄われていたが、ニック・ジョーンズのヴァージョンがそのメロディの豪華なことと、精緻かつダイナミックなギター・ワークで、ほとんど決定版となって、フォーク・ミュージック、ルーツ・ミュージックのシーンではこれによって知られることになった。むしろ、ほとんどジョーンズのオリジナルとっていいほど、彼の名前と密接に結びつけられている。アン

ダースンが怒ったのも、そのためだ。

ニック・ジョーンズは1960年代末から活動していたシンガー／ギタリストで、1970年代のイングランドのフォーク・リヴァイヴァル第二期を担った人の一人。ソロとしては5枚のアルバムがある。暖かく芯のある声と、独特のパーカッシヴなギターで伝統歌を斬新に唄い、人気を博した。そのギター・スタイルはブリテン、アイルランドはもとより、ヨーロッパ大陸にも影響を与えた。またイングランド・スタイルのフィドル奏者としての実力もあり、たとえばイライザ・カーシィなどの源流でもある。

《Penguin Eggs》はジョーンズにとっても集大成であり、キャリアの頂点を画した傑作だったが、1982年、ジョーンズは交通事故で瀕死の重傷を負う。一命はとりとめたものの、脳に損傷を受けたため、運動能力を一時ほとんど失い、一部はついに回復していない。演奏もできなくなり、音楽家としての生命を事実上断たれた。2010年に「復帰」が伝えられたが、かつてのようにはいかず、新しい録音も出ていない。《Penguin Eggs》が最新ということになる。その後リリースされているのは、事故前のライヴ音源を集めたものだ。もっとも、その録音は探しまわる価値は十分以上にある。

コリーンもニック・ジョーンズ版をベースとしていることは、自筆のライナーにも明記されている。

内容はある船乗りにも惚れた娘が船乗りと同じ船に乗って行こうとする。船乗りは娘を船乗りにも仕立てて同乗させようとするが、同僚たちにバれてしまい、同僚たちは娘を海に放ちようとする。しかし船長は娘をかばい、船乗りとしてカナダへと連れてゆく。カナダに着いた娘は船長と結婚し、その後、二人は幸せに暮らしました。だから、娘さんたち、惚れた男には男装してもついていきな。

まずは最も伝承に近い形の歌唱。

Harry Upton, You Never Heard So Sweet (Voice Of The People, Vol. 21, 2012) Harry Upton, Sussex Harvest (1974)

ハリィ・アプトンはイングランドのサセックスに住んでいたソース・シンガーの一人。本職は農民。

この二つは録音が異なる。前者は1963年、Peter Kennedy による。後者は1974年 Mike Yates による。後者の方がテンポが遅く、各スタンザの偶数行の最後の音を伸ばす。メロディは前者の方が起伏が大きく、はっきりしている。メロディ、歌詞ともにジョーンズ版とは異なり、とりわけメロディはジョーンズがかなりアレンジしているのがわかる。歌唱はイングランドの良い伝統シンガーの常で、独特の威厳がある。歌詞を一語ずつ明瞭に発音する。

Tish Stubbs & Sam Richards, Invitation To North America, 1977

ハーモニカのみを伴奏に Tish Stubbs が唄う。これも Harry Upton の版。こちらでは船長による救済よりも、娘の男装に焦点が当てられている。元々この歌は男装して海を渡って活躍した女たちの物語と、そうした男装の娘の一人が船長の心を射止めて成功する話が入り混じっている。恋人を追って男装して海を渡った女たちが多数いたことは史実で、中には大西洋を往復した者もいた。

このデュオは1960年代後半から活動したイングランドのフォーク・ミュージシャン。Staverton Bridge というトリオでも活動している。アルバムは「イングランドのフォーク・ソングから見た新世界」という副題の通りのもの。シンプルきわまる編成で、いかにもイングランドらしい、筋目の正しい、きっぱりした歌唱だ。

ニック・ジョーンズのヴァージョンはまずそのギターに耳を奪われる。薬指を弦に叩きつけてパーカッシヴなビートを出しながら、他の指のピッキングで繊細かつ雄大なメロディを奏でる。そして肩の力の脱けた、しかし底のしっかりしたやわらかい声。声域はバリトンとテナーの間だろうか。ドラマティックな詞を、例によって少しも劇的ではなく、湛々と唄う。イングランドのフォーク・ミュージックが生んだ、一つの究極ではある。

ディランは自身のギターのための伴奏。歌唱も含めてデビュー当時のスタイルだが、声のコントロールはさすがに年季が入っている。

ディランがとりあげたことで、イングランドの伝統歌とはそれがなければ縁も無かったミュージシャンたちがとりあげた。

Seven Nations, Old Ground, 1995

アメリカのケルティック・ロック・バンドがセカンドに収録。ドラムレスで歌にじっくりと向き合い、ロックとしての装飾はあちこちしているが、ヴォーカルはむしろフォーク・シンガーのそれで力演。コーダでは達者なフルートも披露する。

John Wesley Harding, Trad Arr Jones, 1999

このアメリカのシンガー・ソング・ライターはニック・ジョーンズの歌唱に惚れこむあまり、アルバム1枚トリビュートした。ここでは自分の土俵に引き込み、ロック・バンドをバックとしている。本人の歌唱はしかし、精一杯、ジョーンズをエミュレートしている。こういう録音では皆そうだが、実に楽しそうに唄

う。

The Duncan McFarlane Band, Woodshed Boys, 2004

イングランドのアコーディオンもいるギター・バンド。間奏にダンス・チューンのフレーズをはさむ。船乗りたちが酒場でうたっているような二人のヴォーカルがこれによって朗々と唄いはなつ。B級だが、思い切りの良さは買える。

Rathkeltair, Durty Wullie, 2013

ベルファスト出身のシンガー、ギタリストとロンドンデリィ（ママ）出身のドラマーがフロリダ州ジャクソンヴィルで組んだケルティック・ロック・バンド。ドラマーが在籍していた Seven Nations のカヴァー。こちらはアコースティック・ギターとボンゴとリコーダーがバック。ヴォーカルはほぼ同じ。

10,000 Maniacs, Twiced Told Tales, 2015

イングランドのこのフォーク・ロック・バンドももう老舗になった。軽やかなギターとオルガン、硬いドラムスによって女性シンガーが唄う。こうしてロック・バンドの演奏を聴いてくると、どのバンドも真向から歌詞に向き合っている。真正直に唄うようにさせる力をこの歌は備えているということか。

フォーク畑にもどろう。

Ian F Benzie, I'See The B'y, 2001

スコティッシュ・バンドの雄 Old Blind Dogs のシンガー がソロでとりあげる。のんびりしたギター・カッティングと、OBD譲りのパーカッションのサポートに妙にイナたいフィドルがアクセントをつける。本人はむしろやや投げやりに陽気にうたう。ドライなところがいい。

Eilis Kennedy, Time To Sail, 2001

アイルランド有数のシンガーの一人 がファーストでうたう。ギター、ダブル・ベース、フィドルのバック。各音節の間を等分にとり、一音節ずつを丁寧に置いてゆく歌い方。ギターもアルペジオを同様に置いてゆく。基調は明るい、かすかに哀しみを感じられるのは、娘が船に乗るきっかけとなりながら、最後に振られる若者への想いか。

The Outside Track, Laight Up The Dark, 2015

ケープ・ブレトン、アイルランド、スコットランドの混成バンド。ドラム、ベース入りながら、フィドルとアコーディオンからハープまで入った編成で、ハ

スキー・ヴォイスの女性ヴォーカルが唄う。アップ・テンポの突き放した演奏だが、ミュージシャンたちの音楽への親近性はかえって強い。

Andrea Luciani, 57, 2017-09

情報が無いが、イングランドの伝統歌に惚れこんだイタリア人らしい。ギターはニック・ジョーンズとディランの中間、というよりはやはりディランの変形だろう。コードをアルペジオの繰返しで演奏する。唄も悪くなく、もう少しよく知りたいものだ。

さて、コリーンは本人はゆっくりとうたうが、バックは自身のバウロンとギターがドライブするアップ・テンポ。コーラスをハンツ・アラキが合わせる。ゴージャスなメロディを味わうようでもある。要所要所で明瞭に発音する。間奏からはアコーディオンも加わって、バックの厚みが増す。これがかえって緊張感を高めるのが面白い。

やはり、この1曲でスペースをとられて、以下次号。

■ (4) 坂本龍一が語ったグループについて

■ field 洲崎一彦

先日、YouTubeの関連動画、関連動画とめぐりめぐっている時に、とある動画に出くわしました。坂本龍一の音楽の学校の何回目かというTV番組からの動画です。これの題名が「グループの無いリズムの追求」というもので、ゲストが細野晴臣と高橋幸宏。そうです、坂本龍一にこの2人と来ればそのままYMOなんですね！この3人が、まさに30年以上前に世界を席卷したYMOを始めたのメンバーなんです。それで、思わず見入ってしまいました。

興味深い話がどんどん飛び出してくる。当時の最先端技術だったコンピューターでリズムを鳴らすという事がようやく実用に耐えるものになって来た時代で、最先端の音楽製作現場にマニピレーターというコンピューターを操作する専門の技術者が加わるという事が起こってきます。

細野晴臣はその現場の前日までは、黒人音楽やラテン音楽にみられるリズムのグループをどうしたら出せるのかという問題に、ベーシストとして日夜研究没頭していたと語っています。が、その現場、つまりマニピレーターの松武秀樹が拍のタイミングを数値を打ち込んで変化させるリズムを作り出したその現場で、細野、坂本、高橋の3人はいろいろなヒラメキの下にさまざまな音楽実験に没頭

し始めたというのです。

彼らが真っ先にやったのは、細野が追求していたラテン音楽などの独特のグループを持った曲を、この松武の作り出すコンピューターのリズムで演奏することだったと言います。まったく等間隔のリズムに乗せたそれらの曲はまったく違う世界を出現させたというわけです。ここから、世界を席卷したテクノサウンドが誕生したのです。しかし、彼らはその研究の手を止めることなくさらに実験を重ね、例えば12対12という等間隔の拍を、11対13や10対14というふうに変えて色々な曲をそれに合わせて演奏するというような実験を繰り返したとのこと。

そして、10対14という間隔での拍が沖縄民謡にぴったりと収まるという事を発見し、さらに、細野が元々追求して来た、黒人音楽やラテン音楽など独特のグループもこの比率を変えることで再現できるという所に到達したそうです。

しかし、当時のコンピューター楽器、つまりシンセサイザーですが、これは音の強弱がうまく出せなかったのですが、時代が下るにつれてこれが出せるような技術が進みます。すると、坂本は拍のタイミングのずれだけではなくて音の強弱もこのグループの変化に関係するということに気がついて行くという話に進んで行きました。

このYouTubeではこのあたりで話は終わってしまいます。私は彼らが70~80年代に試行錯誤した実験の内実を知って、今さらながらに驚きました。が、この後に彼らのグループというものに対する研究がどこに向かって行ったかという事は、もしかしたら、どこかに何らかの発表がなされていたのかもしれませんが、私は知りません。なので、この番組のTV放送の時点で坂本龍一が語っている事に焦点を絞って私の考えを述べたいと思います。

この時代の技術革新とともに以上の観察がなされた事はすごい事ですし、彼らの感性には驚嘆すべきものがあると思います。しかし、これは単に出て来た音楽の物理的な状態を観察分析したに過ぎないと思います。例えば、10対14の拍が沖縄民謡にはまるというのは物理的事実でしょうが、では、演奏者がこの10対14の拍ですと演奏することができるのでしょうか？沖縄の地元の演奏家は絶対にそんな事は意識していないと思います。むしろ、もっと別な所に意識が行っていて、それで出した音が結果的に10対14の拍になっていたということではないでしょうか？

坂本龍一が終盤に語る、リズムのタイミングだけではなくて音の強弱もグループに関係していることが解って来たと。じゃあ、タイミングか強弱かどっちやねん！ということになる。演奏者はタイミングだけコントロールしては片手落ちで強弱もコントロールするのかい？という事になる。だから、これらは、やはり結果論なのですね。

出てしまった音を物理的に分析してその形を露わにした所で、演奏者がそれを再現することはほぼ不可能というような話の流れになってしまいます。それは、

結局、細野春臣がYMO前夜に日夜取り組んでいた、どうしたらラテンのグルーブが出せるんだろうという探求に対しては何の答えも出していません。

私は、アイリッシュ音楽というほぼ原始的な構造を持つ音楽と接してきて、このような結果論的観察が、演奏という局面に対しては何の役にも立たないということを感じてきました。おそらく、それは、アイリッシュ音楽に限ったことではなくて、すべての音楽に共通する事だと自分では思っています。ただ、私がこれに気づいたきっかけが色々で複雑な要素を持たないシンプルで原始的なアイリッシュ音楽だったというのは非常に大きかったのだと思っています。

だからこそ、日本でアイリッシュ音楽をやっている人達こそが是非この事に気がついて欲しいと切に願うのです。

音楽は音を出す直前までですべてが決まるのです。出てしまった音は、どんなに物理的に分析してもYMOの人達の発見の方向性を越えることはできない。また、その分析結果は人間業で再現できるようなものではない。

だから、私がよく使う表現なのですが、今、日本で行われているアイリッシュセッションは、流れているベルトコンベヤーの上に次々と適切な音を皆で並べて置いていく工場の作業員のような動きではないんですかと。本当は目の前のベルトコンベヤーは勝手に動いているわけではないのです、それぞれの演奏者が自分の力で動かさないとそれは音楽にはならない。そして、この自分の力で動かすという所にこそ、グルーブを生むすべての要素が集約されています。

どんなに、楽器を巧みに操る演奏者であっても、ただ、音を置くだけの演奏にはグルーブもくそもありません。ヘタをすると音楽にもならない。が、しばしば、その不思議な演奏を西欧人には奇異に映ってそこにオリジナリティーがあると良きに解釈してくれるというような場面も出現するかもしれません。

そして、前述のYMOの3人が取り組んでいた試み。確かにこれは西欧人達にはあり得ない発想だったのかもしれませんが。だから、YMOが世に出た時に西欧の人達はそこにとてつもないオリジナリティーを感じて大いにウケたのだと思います。YMOがやった事は、つまりこうです。ベルトコンベヤーを機械で動かした。

確かに、これなら、自力でそれを動かす事を知らない日本人の独壇場かもしれません。片方で、ベルトコンベヤーは自分で動かすものだという発想から逃れられない西欧人達は目の前でそれが自動的に動き出すということがどれほど奇異に映ったかというお話しなのではないでしょうか？

当時は、日本の音楽が西欧に通用した！というような大々的な扱われ方をしたのですが、さて、それはどうだったのでしょうか。

ただし、今や30年前とは違って、コンピューター音楽はまったく普通なものになって来ています。30年前には突然で面食らった西欧人達も、動いているベルトコンベヤーをさらに自分の力で加速させたり減速させたり自由自在に力を加える術をすっかり身につけてしまった。ということは、かつては、ベルトコンベヤー

に慣れていたという優位性を発揮した日本人なのに、またマネできないような音楽を彼らが作り出してしまうという世界になってしまった。つまり、YMOはもうすっかり歴史の事件でしかなくなってしまったということなのではないでしょうか。

さしずめ、今ではベイビーメタルということになりますね。これが何故今西欧にウケているのか。このあたりを一度よく考えてみるとまた面白いものが見えてくるかもしれません。（す）

■ (5)オーケストラアレンジで聴くケルト・北欧の伝統音楽

■ 第10回 アイルランド狂詩曲（ハーバート）

■ 吉山雄貴

前回に引きつづき、今回もアイルランド出身の人物の作品についておはなしします。その名も、ヴィクター・ハーバート（1859-1924）の「アイルランド狂詩曲」。

「アイルランド狂詩曲」？ どっかで聞いたことがあるとお思いになったかたは、第2回をきちんと読んでくださった、ということです。あちらでとり上げた、チャールズ・スタンフォードの作品も、同じ名前です。

ぶっちゃけ、「スペイン狂詩曲」や「日本狂詩曲」も、複数の人物が同名異曲を書いています。

先に、作曲者について説明しましょう。
ハーバートは、スタンフォードと同じダブリン生まれ。ですがアメリカ国籍を取得し、新大陸に活躍の場を見いだしました。

主要な作品の多くは、ライトオペラと呼ばれる、娯楽的な要素の強い軽〜いノリのオペラ。ミュージカルの前身でもあります。またこの人物、生前はかなりの売れっ子作曲家だったようです。

ハーバートの「アイルランド狂詩曲」は、早いのはしが、アイルランドの有名な伝承曲をつなげたメドレーです。長さは15分ほど。

スタンフォードのものと比べると、原曲のメロディをあまりいじらず、忠実にオーケストラ・アレンジを施したような印象です。そのため晦渋な部分はなく、終始明快。ただ、スタンフォードの狂詩曲のような物語性は、たぶんナイな。

こちらでお聴きになれます。

<https://www.youtube.com/watch?v=CmRx0u9t5hk>

引用されている伝承曲は、私が知っているものだけでも、次の3つ。いずれもかなりの有名曲です。

すなわち、(1)Believe Me If All Those Endearing Young Charms、(2)The Rocky Road To Dublin、(3)St. Patrick's Day。

前奏がおわると、直ちにBelieve Me If All Those Endearing Young Charmsが出現。

このいやに長ったらしい題名は、トマス・ムーア（1779-1852）がつけた歌詞の歌い出しです。内容は、あなたの美貌もいずれ失われるだろうけれど、それでも私の愛はますます募るばかりだ（だから私を信じてほしい）、というもの。カッコいいですね。

これ実は、皮膚病を患った妻に贈った詩だといわれています。

トマス・ムーアは、アイルランドに古くから伝わる多くの旋律に詩をつけた人物として、「アイルランドの国民的詩人」と敬愛されています。

第1回で紹介した、「アイルランド組曲」にも引用されている、The Last Rose Of Summer（夏の名残りのばら）の歌詞も、彼の手になるものです。前回の「アイルランド交響曲」で用いられた、Avenging and Brightもそうですね。

またBelieve Me（以下略）は、日本でも「春の日の花と輝く」という題で、戦前から親しまれています。「春の日の花と輝く」もまた、堀内敬三氏（1897-1983）による訳詞の最初の部分。

日本語は英語などヨーロッパの言語と比べ、音節の種類が少ないため、1つの音符にこめられる情報量が、相当程度制約されます。であるところ、少ない語数で原詩の大意を的確につかんだこの訳詞は、個人的にかなりの名訳だと思うのです。

そしてこの堀内敬三という人物。世間的にはたぶん「若き血」という、大学野球の応援歌を書いた人物として、知られていると思います。

しかしその一方で彼は、スコットランド民謡Annie Laurieや、ノルウェーの作曲家グリーグが書いた、同国の文豪イブセンの劇の挿入歌「ソルヴェイグの歌」などの訳詞も、手がけています。

ハーバートの「アイルランド狂詩曲」には、他にも、おそらく伝承曲と思われる旋律が、3つほど出てきます。

そのうちの1つ。St. Patrick's Dayの直前に現れる3拍子の曲からは、どこことなくオキャロランの匂いがします。

また、The Rocky Road To Dublinに接続されているポルカは、このセットにも含まれていますね。

<https://www.youtube.com/watch?v=tDRdabkBM28>

どちらも、なんという名前なのでしょうか。

ハーバートの「アイルランド狂詩曲」が聴けるCDは、私の知るかぎりこれだけです。

【アイルランド狂詩曲】

リチャード・ヘイマン&ヒズ・オーケストラ

録音年：1989年

レーベル：ナクソス

このCD、アイルランド伝承曲やアイルランド風の旋律を用いたクラシック音楽を集めたディスク、という企画のようです。「アイルランド狂詩曲」以外に、先述した「アイルランド組曲」も収められています。

また、ハーバートの「アイリーン」なるライトオペラから1曲を抜粋しているほか、CohanやO'Connorといった、いかにもアイルランド人っぽい名前の人物の作品がズラリ。

■ (6)ざっくり学ぶケルトの国の歴史 (17) 独立する直前のお話

■ 上岡 淳平

イースター蜂起って大きな事件以降、アイルランド国内で大きな揉め事が勃発、ついに英国も重たい腰を上げて条約を結び、休戦にこぎつけた…わけだけども、英国＝アイルランド条約の内容は、英国が出したギリギリの妥協案だった。それは北側（アルスター地方）の数州を除いて、ほとんど独立国と同じ待遇にしてあげるけど、あくまでも英国統治下に入ってるからね、という内容だった。

その条約を巡って、今度はアイルランド人同士で争いが起きた。それほど長くはかからなかったけれど、マイケル・コリンズなどの有能な人材や多くの国民を、国民自らの手によって失った。その代償の上に条約賛成派が勝利をつかみ、アイルランド自由国（in英国）が成立した。

そんな難しい状況の中で大統領に就任したのがイーモン・デ・ヴァレラというおじさんだった。そしてアイルランド政府として、英国とは違う方針を立てようと苦心した。それでも英国政府が比較的協力的だったこともあって、少しずつ独立に向けて歩んでいた…矢先に、今度は第二次世界大戦が起きた。

でも今度の戦争はアイルランドと英国の差別化に一役買った。

それはアイルランド自由国は、英国とは違う方針を立てようとしていたため、戦争に全く手を貸さなかったんだ。（英国やアメリカはもちろん激怒）でも北アイルランドは英国として戦争に参加した。この行動は戦勝国からは問題視されたけれど、それ以上に英国とアイルランド自由国が別の国だということを世界に知らしめた。（反面アイルランドと北アイルランドの溝も深まったんだけどね）

そして、1949年4月。ついにアイルランド共和国が正式に成立し、悲願の独立国達成に国中は沸いた。（もちろんアルスター地方の北アイルランドを除いて）

というところで、ケルト音楽を文化的・歴史的な側面から見てみよう、まさかの紀元前からはじまったこのシリーズも現代までたどり着きました！あと少しだけ余談の回がありますが、お読みいただきありがとうございました。

■————(7)編集後記————■

秋の気持ちのよい気候、音楽関係のフェスやイベントも多く開催されていますね。先日はFlookのコンサートに行ってきました。Flookを見るのは4回目になるかと思えます。最初は最も印象深く、2001年にアイルランドの西のはてのDoolinの小さなカフェで。その次は名古屋のカルチャーセンターのような会場でした。僕の青年期のヒーローが、こうして今も第一線で活躍していることが嬉しいです。そして確実に進化して、ますます神がかってきました。

そうそう、ヒーローといえJean-Michel Veillonさんも、僕にとっては一大事です。フルートを吹く人で彼を知らない人はいないというほど、世界のトップ奏者の一人。すごいものを目撃することになるでしょう。ぜひ、ご来場をお待ちしています。

当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読めないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、毎月の連載形式でも結構です。ご応募に際しては、

- ・CDレビュー
- ・日本人演奏家の紹介
- ・音楽家や職人へのインタビュー
- ・音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い

取りいたします。ご応募は info@celtnofue.com までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますので
ご利用下さい。

<https://celtnofue.com/community/event/>

★全国のセッション情報はこちら

https://celtnofue.com/play/session_info.html

★全国の音楽教室情報はこちら

https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html

=====

クラン・コラ：アイルランド音楽の森（月2回刊）

発行元：ケルトの笛屋さん

Editor : hatao

*掲載された内容を許可無く転載することはご遠慮ください。

*著作権はそれぞれの記事の執筆者が有します。

*ご意見・ご質問・ご投稿は info@celtnofue.com へどうぞ。

*ウェブ・サイトは <http://www.celtnofue.com/>

*登録・解除手続きはこちらからどうぞ。

まぐまぐ！ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>

Melma！ http://melma.com/backnumber_98839/

*バックナンバーは最新号のみ、下記URLで閲覧できます。それ以前の号をご
希望の方は編集部までご連絡下さい。

まぐまぐ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>

Melma! http://www.melma.com/backnumber_98839/

=====

—...— ↓ メルマ！PR ↓ —...—

格安&高速！

WEB申込限定でキャンペーンも！

格安スマホなら、UQモバイル♪

<http://rd.melma.com/ad?d=A0F0bRHDg0v1H6ln60cEoWPnl1vac4ha2754aa34>

..... ↑ メルマ！PR ↑

■今回の記事はいかがでしたか？

下記ページより、あなたが記事の評価を行う事ができます！

http://melma.com/score_F0v186vn10wEeWUnU1AaL4Va20e1dcf6/

□このメルマガのバックナンバーやメルマガ解除はこちら

http://melma.com/backnumber_98839/

□その他のメルマガ解除や登録メルマガの検索はこちら

<http://melma.com/contents/taikai/>
